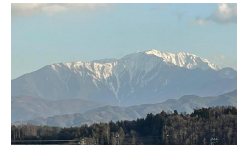


ああ 遠くの空は 晴れている



NO13

南箕輪村教育委員会

本村では、「授業の充実」を学校づくりの根幹と考えています。

今回紹介する、藤本三郎氏の「基礎学力について」の提言は、どんなに時代が進んだとしても、不易な部分として、日々の授業において大事にしていきたい内容であります。

(※教育指導時報・・・長野県教育委員会事務局が県内の教職員対象に発行している教育雑誌です)

昭和62年度 教育指導時報4月号 随想より

基 礎 学 力 に つ い て

藤 本 三 郎

昭和11年、私は代用教員（臨時講師）として川路小学校で3年生を担当していました。その時郡教育会主催の講演会があり、西尾 実先生のお話を聞きました。演題も忘れましたが、国語教育に於ける教材研究のお話だったと思います。その中で先生が次のようなお話をされたことが、妙に印象深く記憶に残っています。

「学校では一般に新1年生と高学年の担任には、ベテランの先生を当て、3・4年生には経験の浅い先生を当てる傾向がある。勿論それにはそれなりの理由があろうが、子どもたちが生涯生き抜いていくのに欠くことの出来ない基礎学力を身につけるのに最も重要な時期は3年生である。1・2年生に大切な生活訓練は、親もその責任を分担し合って協力してやればよいが、国語で言えば、3年生になって一挙に倍増する漢字の読み書き、文の綴り方、読解力などの確かな習得は、全く教師の責任であり、この習得の是非はその子の一生の幸、不幸を左右する。基礎学力の不徹底は長く尾を引いて一生つき纏う。このことの重要性に気づいてほしい。しかも人は成人して、自分の持つ学力が誰のお蔭かに気づかない。教育を受けて最大の恩恵は、身につけて戴いた学力なのである。」という趣旨のお話でありました。たまたま3年生の担任であり代用教員であった私を感動させずにはおかなかったのでしょう。

大村はま先生は、名著「教えるということ」の中で、「子どもは……結局きびしい世の中にたった一人で生きていかなければならないのです。その将来何十年か先をじっと見通して、子ども時代の今日この日にしなければならぬことがあるのです。ぜひとも鍛えなければならぬことがあるのです。」「教師としての子どもへの愛情というものは、とにかく子どもが私の手から離れて、一本立ちになった時に、どういうふう人間として生きていけるかという、その一人で生きていく力をたくさん身につけられたら、それが幸せにしたことであると思います。……国語の教師としての私の立場で言えば、その時、ことばの力が足りなかったらいかにみじめかと思えます。平常の、聞いたり、話したり、読んだり、書いたりするのに事欠かない、何の抵抗もなしにそれらの力を活用していけるように指導できていたら、それが私が子どもに捧げた最大の愛情だと思えます。」と書かれ、更に有名な「仏様の指」という奥田正造先生のお話を引用されて、重い荷車をぬかるみの中から、やっとの思いで引き出した男は、それが御仏の指の力にあずかったことを永遠に知らないように、私たちの仕事は、子どもたちに精いっぱい努力すること自体が生きがいであって、それでじゅうぶんにおくいられたのである、ということを説いておられます。身の引き締まる思いがいたします。

また別のところで、「他の子どもは書けたけれども自分は書けない。そんな苦しみをしている子どもを助けなくてよろしいんですか。……それを優劣にわけて、“だれが上手で、だれが下手”というようなことは、指導者として、すべきことではないと思います。」「“一生懸命指導しましたけれど、お宅のお子さん、どうもうまくおできになりません”私は、そういうことは、教師として言うべきでない。教師が一個の職業だというんなら言うてはいけないと思います。……そうしてうまくいかない責任は自分でとるべきであって、相手が勉強しないなんてそんなことは言えるものではありません。」とも言っておられます。何とも言葉はやさしいが、きびしい言葉ではありませんか。

西尾先生と大村先生との出会いには感銘深いお話があります。それを大村先生のお言葉（雑誌、総合教育技術大村はま特集号—昭和 60 年 10 月増刊号）で紹介します。「私が今の八潮高校、元の第八高女にいましたときに、第八から我が国語を担当していた生徒が女子大へ三人そろって受かったんです。そして西尾先生に教えていただいたんです。その人達が一種異様によくできたんだそうです。それでこの力のかげには、だれかが捨て身になって国語教育をやっていると先生は思いになったのだそうです。そして第八をお探しになって、私を見つけてくださったんです。それで文部省で教科書を作るときになったとき……西尾先生が私のことを思い出して下さって、名をあげてくださったのです。」よく私たちは、「授業で勝負する」と言います。これが本当の「授業で勝負」したことではないかと思います。この言葉を掛け声で終らせることなく、子どもにどれだけの学力をつけたか、をお互いに問いかけ合いたいものです。大村先生は、またこうも言うておられます。「一人前というのは、自分で自分のテーマを決め、自分で自分を鍛え、自分で自分の若さを保つ、これを一人前の教師というのではないでしようか。」と。

（長野県教育委員会委員長）